

ラブライブ!サンシャイン!!短編

かなま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ラブライブ！サンシャイン!!のカップリング短編集です。

不定期更新です。

カップリング地雷等、お気をつけください。

いろんなカップリングで書いていきます。

目次

ようりこ「ずっとあなたと」

第1話

1

第2話

8

ようりこ「ずっとあなたと」

第1話

あなたとずっと一緒にいたかった

「だーーーーーいすきっ」

「私もっ」

『あはははははは』

昔の記憶が急に溢れてくる。

「曜ちゃんは…あの時、どんなつもりで言ったのかなあ……」

私は今、ヨーロッパはオーストリア、ウィーンでピアニストとして活動している。

高校卒業後に音大に入って、ずっとピアノに打ち込んできた結果だ。最初はただの留学だったけど、留学先の街にあったオーケストラのピアニストが引退してしまい、力試しで受けたオーディションに合格。気がついたらデビューしていた。

「あ、いけない！ バイトの時間！」

急いで支度をして部屋を出る。ピアニストとしてデビューはしたものの、まだピアノだけでは食べていけないので、街角のカフェでバイトをしている。

「いらつしやいませ。 お好きなお席へどうぞ」

必死に勉強して覚えたオーストリアジャーマンを使つて接客をこなしていく。留学する前は、音大でドイツ語を勉強していたのでなんとかなると思っていたのに、オーストリアはオーストリア独特のドイツ語だと知った時は驚いた。いや、音楽を勉強していたのに知らなかった方がおかしいのか。

「あつはははは！ 梨子ちゃんらしいや」

頭の中に私の想い人の声が過ぎる。彼女が知ったらこうやって笑われるのだろう。それすら私には心地好い。

「曜ちゃん……」

私は、彼女にずっと恋をしていたのだと気がついたのは……

ウイーンに来てからだった。

く日本く

「曜ちゃん……ん。 いつまでそうしてるつもりー?」

「……ずっとであります」

「はあ……おーい！ 梨子ちゃん！ 日本に帰ってきてー！ 私の幼馴染

がこのままじゃみかんになっちゃうー！ー！」

「どうせならみかんになりたいであります」

「……っ!? ツツコミすらしてくれないなんて!」

梨子ちゃんが留学してから、私はずっとこの調子。大好きな人に、好きだと伝えられず、また今度また今度、次に会ったら伝えようと先延ばしにした結果。

私の想い人は海の方こうへ行ってしまった。

「うえ……ぐす……梨子ちゃん……」

「あー! ほらほら涙拭いて……もう……曜ちゃんいつから泣き虫さんになっちゃったの?」

「ウーン……」

「返事になってないよ……別に今生の別れじゃないんだから……」

「難しい言葉を知ってるね」

「あ、そこは反応するんだ……。って! チカを馬鹿にしたなー!? 国語の先生なんだからこれくらい知ってるよ!」

私の幼馴染の千歌ちゃんは、中学校で立派に国語を教えている。それに比べて私は……

「……代表選考に落ちたであります」

「まだ落ちたって決まったわけじゃないじゃん！ てかこれから結果発表じゃん！」

「あんな演技じゃ確実に落選であります」

「だーーーーー！ ネガティブ曜ちゃんめんどくさっ」

「うええ……私は面倒臭い女なんだあ……」

「ああもう！ すぐに泣かないの！」

私は今、プロの飛び込み選手として活動している。しかし、梨子ちゃんが留学してから成績は伸びず、向こうでピアニストとして活動を始めたと知った時からはどんどん身体が鈍ってきている。

「代表に合格したら……ウイーンで国際大会だったのに……」

そう、次の世界水泳はウイーンで開催するのだ。代表になれば向こうへ行ける。梨子ちゃんに会える。

「なのに……もし落選したらどうしようつてずつと頭の中で考えちゃつて……全然練習できなかつた……」

ついさつき、私の演技は終わった。今は点数の発表待ち。付き添いで来てくれた千歌ちゃんが私を励ましてくれていてるけど、結果は演技をした自分が一番把握できている。

『渡辺 曜選手の結果発表です』

場内アナウンスがなる。テレビでも放送されている全国大会。この大会で1位になれば……

「ウィーンに行けたのに……」

『わああああああああああ』

会場が歓声に包まれる。私の演技順は1番最後だった。ゆえに私の結果が表示された時点で1位の人が代表に決まったのだろう。この歓声の具合からして、さつきまで1位だった人がそのままウィーンだ。

「帰る準備をしよう」

そう呟いて立ち上がった瞬間

「やったね曜ちゃん!! すごい! すごいよ! 日本記録だつて!!!」

千歌ちゃんが私に飛びついてきた。

「うん、凄いね1位の人。この前と同じ人でしょ」

「違うよ! いつまで馬鹿になってんの! 曜ちゃんだよ! 曜ちゃんが! 日本新記録で! 1位なの!」

「……ふえ?」

「ほらー!」

千歌ちゃんは、私の頭を掴んで会場の特大液晶に向ける。

1. 渡辺曜 ……○○○. ○○○点 日本新記録

「は？」

「は？ じゃないよ！ 目を覚まして！ ウイーンだよ！ 梨子ちゃんに会えるよ！」

信じられない。あの演技で……。

私は自分の演技のハイライトが流されている液晶に齧り付く。

「綺麗……」

自分で言うのもあれだが、凄く綺麗だった。顔は真剣で、回転の回数もたりてる。入水角度も完璧だ。

「曜ちゃんね、凄く真剣だったよ。オーラが違った。絶対にウイーンに行くんだって気持ち伝わってきた。曜ちゃんはもっと自分を評価してあげて？」

千歌ちゃんは、私の頭を撫でながら優しく語りかけてくる。

「曜ちゃんが着水したあと、しーんと会場が静まり返ったでしょ？ 曜ちゃんはそれで勘違いしたの。下手な演技しちやっただーって。だけどね違うの」

そうだったのか……。

「あれはね」

私は……。

「みんな、曜ちゃんの演技に見蕩れて声が出なかつただよ」

ウィーンに行くんだ。

第2話

「千歌ちゃん！ 準備できた!? 行くよ！ ウイーンだ！」

「ちよつと待てい」

「なに!? 急いで！ ウイーンなんだよ！ 全速前進ヨーソローなんだよ！」

「世界大会は2ヶ月後だからね？ ウイーンに行くのもそれくらいだよ？」

「そうだった。私、焦ってたや。」

「えへへ。確かにそうだね。でも2ヶ月かあ。長いなあ……。楽しみだね、

ウィーン！ 梨子ちゃんと3人でどこ行こつか！ 案内してもらおうよ」

「ほえ……。？ チカは一緒に行けないよお。授業もあるし、そもそも曜ちゃんは日本

代表なんだからスタツフさん達と一緒にしよ」

「は？」

「いや、は？ じゃなくて……」

「え？」

「そういうことじゃあないでしょっ」

千歌ちゃんが……。一緒に……。来れない……。？

私はどうすればいいの……？

「とにかく、まずは着替えなよ。いつまで水着なの？ 風邪ひいちゃうよ」

「うん……」

私の頭の中は、いろいろなことで一杯だった。

くウーンく

「梨子！ あなたの友達でしょ？ 凄いじゃない！」

ピアノの練習をしていたら、同じオーケストラの楽団員達が新聞を持って駆け寄ってきた。

「え？ どうしたの？」

私はなんのことかわからず、きよんとする。

「新聞見てないの？ 今度の世界水泳！ 日本代表の1人、You W a t a n a b e
！ あなたの友達でしょ」

「いつもご飯の時、うっとり眺めているじゃない」

「そうよねえ。梨子ったら、スマホの画面ずっと眺めてご飯食べてるもの」

「なにみてるのー？ って話しかけても上の空の返事でき」

「気になって覗いたら、可愛い女の子と梨子のツーショット！ 青春ねえ」

「新聞見ていたらその子が載っていたの！もうびつくりよ！」

「え!? 待って!? 見られてたの!? やだあもお……」

私は恥ずかしくなつて楽譜で顔を隠す。いや、待ってほしい。この子達はなんていった!?

「ちよつと見せて！」

新聞を奪い取り、スポーツ欄を凝視する。そこには

『日本の高飛び込み代表は You Watanabe。高難易度の前逆さ宙返り3回半抱え型を見事に決めて日本新記録。2ヶ月後にウィーンで開催される世界水泳に、日本から期待の若き刺客が飛び込んでくる。』

眩しい笑顔で、表彰台の1番高いところに堂々と立ち、金メダルを掲げているのは……

「曜ちゃん……」

間違えるはずがない。私が今1番会いたくて、1番傍にいたくて、1番傍にいて欲しくて、1番大好きで、1番想いを伝えたくて……

「1番会いたくない人……」

「え？」

私が最後に漏らした日本語は、他の楽団員達には聞き取れなかつたみたいだった。

く日本く

「渡辺」。そろそろ練習終わりにすつかあ」

「はい！　ありがとうございますー！」

プールからあがって、身体を拭く。

あれから1ヶ月。私はどんどん技の精度に磨きをかけていった。身体が最高のパフォーマンスを発揮する波を掴み、そのタイミングを本番にぶつける為に調整を続けている。

「あと……1ヶ月。梨子ちゃんに会いに行くんだ」

好きという気持ちを、何度も何度も身体に乗せてプールに落とし込む。そんな日々を送っている中で、一っだけ不安なことがあった。

「返信……来ないなあ。忙しいのかな」

代表に決まった数日後、私は梨子ちゃんにLINEを送った。

「代表に選ばれたの！　ウィーンに行くよ！」

それに対して、返事はただ一言。

「おめでとう」

私は

「どこかのタイミングで会えないかな？　ご飯でも」

「く……っ！ 封印されし墮天使の力が暴走してしまったみたいです。 まだまだ修行が足りぬか……」

「修行って……」

「久しぶりに曜達に会うのよ。 昔みたい……その……あの頃は楽しかったから……」

そう言って俯く善子ちゃんの頭を私は撫でる。

「頑張ってるもんね、善子ちゃん。 今日くらい良いんじゃないかな。 自分の”好き”を隠さなくてもさ」

「ありがと……っ、頭撫でるなー！」

「あははははは」

「あんたも自分の”好き”、いい加減に隠すのやめなさいよね」
「う……」

痛いところをつかれた。隠しているつもりはない。だけど、抑え込んでいるという部分では、ある意味隠していることになるのだろう。

私は遙か海の向こうにいる、想い人に向けて心の中で呟く。

会いたいよ、梨子ちゃん